「江戸庶民文化を知る」～浮世絵の変遷と浮世絵版画の技法～

2019 年 12 月 13 日（金）実施　JGA 第一支部研修終了レポート

12.月 13 日（金）13:30～16:30、神宮前の東京ウイメンズプラザに於いて、第一支部主催による「江戸庶民文化研修」が実施されました。　淑徳大学人文学部客員教授及び国際浮世絵学会常任理事としてご活躍されている小澤弘先生を講師にお迎えし、総勢 29 名（JGA 正会員 25 名、非会員 2 名、運営委員 2 名）が参加しました。

講義は三部構成で、一部：日本と浮世絵、二部：浮世絵の歴史、三部：浮世絵名作 100 選でした。

一部では、ガイドする際の参考になるよう、浮世絵の置かれている現状として、浮世絵を所蔵している代表的な日本の美術館と海外の美術館の所蔵数に圧倒的な違いがありました。また、日本と西洋の美術館内の展示方法の違いは日本人と西欧人の導線の違いが大きく影響していることや、日本を象徴するものが富士山・芸者ガールから北斎の「冨嶽三十六景 神奈川沖浪裏（The Great wave）」で代表される浮世絵に代わってきているとのご説明がありました。

二部では、浮世絵の浮世の意味や浮世絵が「見立て絵」に代表されるように当初は富裕層にしか受け入れられていなかったのが、徳川幕府の参勤交代等の政策により江戸に武士が集まると、それに伴い商人や職人も増え、経済活動の中心が京都から江戸に移行するにしたがって一般庶民にも普及したとのことでした。特に今でも歌舞伎座の演目を描いている鳥居派が京都から江戸に移った事は大変興味深いことでした。

三部では、1670 年代に活躍し、浮世絵の創始者とされている菱川師宣（ひしかわもろのぶ）から明治初期の「ラスト浮世絵」の絵師の 1 人である河鍋暁斎に至るまで浮世絵を時系列で見ることが出来ました。それぞれの浮世絵の時代背景や特徴、見どころ、技法の時代別の移り変わり等を詳しく 300 点の浮世絵をみながら聞くことが出来、ガイディングする際に直接役立つ内容でした。

全体を通して浮世絵が、カメラのない時代にその時のファッション、美人、風俗、年中行事、男女関係、庶民生活等、ありとあらゆるものを極彩色で描いたコンテンポラリーアートであり、西洋人が驚かないわけがない事が良く理解できました。

参加された方からは美術館では決して学べない浮世絵の総合的な事から、奥深い見どころまで理解が出来て、ガイディングに大いに生かせるとの声が多く聞かれました。